

神奈川県現代俳句協会会報

第168号
令和7年6月発行

第四十三回神奈川県現代俳句協会総会報告

安藤 久美子 記

二〇二五年三月二日(日)
於…かながわ県民センター



芳賀陽子会長
(写真撮影：石川夏山)

春の穏やかな日差しに満ちた暖かい日だった。午後十二時三十分より、二階ホールで開催された。役員の方々により、手際よく会場が整えられた。受付を済ませ、一句会費千円などを支払って、総会資料や、一句会の投句用紙、選句用紙の入った封筒を受け取った。

総会の開始前の十一時に席題が発表された。ホールの入口と壇上に本日の一句会の席題「雛」と「水」が貼り出された。席題のどちらかで俳句を一句作り、総会の始まる前に投句ということである。総会が始まるまで、俳句を作ったり、昼食をいただいたりした。本日の出席者は五十四名だった。

た。

午後十二時三十分、総務部長の佐々木重満氏の総会開会宣言、副会長の伊藤眠氏の開会のことばで総会が始まった。事務局長の佐藤久氏により、出席者数五十四名と委任状一五三で、会員数(四二〇名)の四分の一を満たしており総会成立が告げられた。そして会長の芳賀陽子氏の挨拶があった。議長を選出があり、議長に長濱藤樹氏、副議長に岡田恵子氏が選出された。

まず、事務局長佐藤久氏の二〇二四年度事業報告、経理部長三上泉氏の決算報告があり、監査役麻生明氏の監査報告が行われた。

次に、二〇二五年度の事業計画案や予算案、役員・規約改正等が承認されていた。企画部は発展的解消ということになった。

その後、新会員・役員の紹介が事務局長の佐藤久氏からあり、皆さんにこやかに挨拶された。会場は心和む雰囲気にもまれた。

総会が終わり十四時頃、本日の一句会の作品集が配られた。選句を兼ねた休憩時間があり、選句は一人三句の互選である。会場はしばらく選句に集中し静かになった。

一句会の司会は藤田裕哉氏、披露は、菅沼とき子氏、杉美春氏、渡辺和弘氏、採点係は尾澤慧璃氏他三名が当った。その後、講評に移る。川村智香子氏、岩田信氏、鹿又英一氏、山下遊児氏、なつばぎ氏、大本尚氏、尾崎竹詩名誉会長、芳賀陽子会長の講評を戴いた。ご自身の選句された句

トピックス

第43回総会報告

諸家近詠

サミット短信

吟行しようよ!
(第2回)

夏の一句



を中心に、その他の句についても、幅広く講評があった。作者の視点の良さ、惹かれた言葉、フレーズの良さ、季語の選択、イメージの広がり、切れ、自由さ、詩情についてなど示唆に富んだお話をされた。同じ句でも様々な解釈があり、一句一句の鑑賞が更に深まっていった。

その後、採点係尾澤慧璃氏から一句会の成績発表があり、表彰、賞品授与が、晴れやかなざわめきと拍手の中で行われた。

最後に、副会長の内藤ちよみ氏の閉会の挨拶があった。総会は和やかに滞りなく終了した。



会場風景
(写真撮影：石川夏山)

当日一句会 報告

(一人一句)

雛壇はうしろの闇に支へられ
ひゅーと飛ぶ水切り石や風光る
雪解水川が光を受胎する
捨雛やしーんとじんるい見てをりぬ
雛飾る水平線の見える宿
真夜中の雛ひそかに酒の宴
雲雀東風けんかしたまま水曜日
黄水仙ふふつ甘いもの食べようか
夕照の帯に乗りゆく流し雛
自販機の富士の湧水句草
行く雲や流るる水や春の鴨
水菜食べおさなはきはきものを言い
雛祭納戸の奥から出られない
紙雛昨夜の風の湿りかな
陽炎へホースの水のほとぼしる
飾る度名前問ひをり雛の客
みちのくの山火の果ての春の水
花菜畑ひとつ分水嶺に跨って
春めくや自分磨きの水鏡
水音の近づきてくる山桜
雛の夜表の顔を取り外す
お水といふ生き方のあり蜆汁
雛祭り七つの吾子の許嫁
水温むペンキ塗り立て観光船
投句済み朧月夜の水となる
天と地をつなぎて春の水豊か
木道を涉りゆく風水草生う
囀水の流れに逆らいて
貝雛遠き潮騒聞いてをり
杉花粉水に流せよ誤字脱字
雛飾り部屋中ぱつとにぎやかに
百円の春の水道行く渡し
春愁や地下も地上も水びたし

尾澤 慧璃

川村智香子
大本 尚
菅原 若水
竹村 半掃
佐藤 久
菅沼とき子
なつはづき
平田 薫
関根 洋子
尾澤 慧璃
廣崎 龍哉
渡辺 テル
三上 泉
植田いく子
堀口みゆき
瀬崎 良介
つはこ江津
麻生 明
里見 美季
星 由江
岡田 恵子
鹿又 英一
神谷たくみ
石川 夏山
安藤久美子
岡田 翠風
野木 桃花
金栗トモ子
杉 美春
長谷川昭放
岩田 信
青木 敏行
山下 遊児

子の声の水底跳ねし木の芽時
雛の前いつもまつすぐ子のことば
小町雛へ百夜通いの道明り
池の水かすめし鷹は鳩と化し
雛飾ることも無き夫との暮らし
春の水埴輪の眼目覚めけり
鳥帰る水平線へたどり着き
空爆に住居無くすや御殿雛
往つたり来たり運河の水が春を待つ
雛送り小舟の水脈の消えにけり
逃げ水やしあわせ芝居演じおる
三十五年妻のならひの雛飾
夜の雛静寂の中のささめごと
主役にはなれず水つぼい春シヨール
雛飾る年月古るを知らさるる
雛あられの昆布選り食むや我が娘
振り時計の音響きたる雛祭
右左妻に確む内裏雛
雛あられ母の言葉を噛みしめる
水澄んで紺碧の海帆が二つ

渡辺 和弘
加賀田せん翠
北村 文江
伊藤 眠
田中 悦子
中山 妙子
吉田半夏生
佐々木重満
尾崎 竹詩
長濱 藤樹
芳賀 陽子
藤田 裕哉
田畑ヒロ子
内藤ちよみ
渡辺 正剛
田淵 信也
池田恵美子
星 一義
安藤 靖
登 秀子

諸家近詠(到着順)

聖五月

中村 敬(カンナ)

湯上がりの香る赤子や聖五月
はみ出して描かる絵手紙蛸の足
四股踏んで身構へる子ら柿若葉
祭着の二人自転車乗せ行けり

処方箋

川野ちくさ(壘)

鳥雲や太極拳の指の先
永き日や隣家の人工芝の青
神職の下駄真新し竹落葉
初蟬や一枚減りし処方箋

穂の芽

鶉飼 教子(あかざ)

穂の芽の袋を攫ふビオトープ
チューリップの萼剥がれさう膝にひび
節句来るはらりと舞へぬ柏古葉
柏餅竈つづきの広き土間

八戸

金子 和夫

事故三件の圏央道や春の旅
こぶし咲く東北道や中尊寺
春の雪車窓から見る岩木山
八戸の三八城公園辛夷咲く

花びら餅

神谷 純子(無所属)

ふくふくと花びら餅の佳き甘さ
正装の母うつくしき卒業式
小判草そろばん塾の優等生
トンネルをぬけて元町秋の空

俳句

小山 美穂(みちくさ・波)

春告草紅白にと咲きほこる
浮かれ猫ニャンプロしては戯れぬ
雪しろに子供達らが遊びいる
ネズちゃんよ涅槃で会おう又今夜

風車

小林ひろこ(顔)

風車の地藏堂より宙の音
朝の陽に禍福寄りたる花筏
禱る身に代わりて靖国桜咲く
まほろばへ富士が領巾振る春疾風

山笑ふ

大佐田うづき

山笑ふ明日の悩みを悩む今朝
種蒔きて育ててみねば人の子も
料峭や嫁ぐ子の荷を見送る日
天の川渡る世間の鬼は誰

初夏

小林 梢 (茅ヶ崎しんじゅ会)
夏兆す伝はる鼓動新樹かな
夏初め捌く技見せ活きの良さ
活きの良さ包丁捌き鏗かな
空白く小雨の煙る初夏の朝

十二単衣

大崎 恵実 (ランブル)
雛あられ摘む桃色杏色
雛の宴小さき茶碗に薄茶点て
色褪する十二単衣や雛の家
亀鳴くや三十一文字の恋心

春立つ

川田 潔 (さざ波)
梅の香のほのかに漂う野良作業
立春の光の中に鏝立てり
取り残す木守柿ありすずめ五羽
初春に新築成りて祝い唄

花齋

生田 暁美 (鷹)
新宿の町の色消えなごり雪
霾やネット社会の闇に住む
手を振つて人まちがへや花齋
退院して野菜をもらふ夏はじめ

夏来る

占部美土子 (無所属)
新緑の綾なす色や幾重にも
青葉雨濡れし白髪の実珠色
鈴蘭の手折りの軽さリリリンリ
よろけたらすくつと立とふ夏来る

新会員紹介欄

泥

星 一義 (顔)
田植機の轍の泥の新しく
泥団子見せに来る子や麦の秋
印泥を練る窓際の薄暑かな

メトロノーム 宮川 柚子 (無所属)

来し方を上書き保存梅に触れ
草青むメトロノームの小豚の尾
北斎の波なす桜ぐりけり

檸檬

風野 であ (波・小熊座)
檸檬すっぱし私の中に少女棲む
出産の母子へ父へ月明り
子の声の車内放送冬あたたか

サミット短信

辻堂句会

奥村 純子 報

第三一六回

於・明治市民センター
令和7年2月22日

白障子向こうへ夜が落ちてゆく
梅林の真白き香り零れ来る
トランプの妄言寒しウクライナ
老梅や節くれてな二三輪
紅梅や人声に彩加わりぬ
包帯のひらひらほだけ蝶となる
春光を吸いプリプリの子供たち
宝くじ橋より捨てる春立つ日
梅一枝引き寄せ香り愛でにけり
梅の香や闇夜に鳴くるらしき
悲しみを重ねて丸く沈丁花
孤被る寒の牡丹の笑顔かな
身ほとりの願ひ集めし桃の花
感情のゆるやかな椅子春よ来い
春一番パンツルックのお嬢さん
時速し百歳は其処二月尽
残る鴨番の水脈を残しをり
ボーイ・ソプラノ。忌ノ黄ノ鍵ノ花ミモザ
五百羅漢のひそむ懸崖花水仙
如月や米ぬか屑葉庭に埋め

第三一七回

令和7年3月29日

靖国の兵魂もまた開花待つ
土筆摘む余命告ぐ医師ためらはず
潮の香のサザン通りに燕来る
話すほどこじれる話山笑ふ
春の風邪ゆきひらの粥あふれけり
春愁の雲の駅まで行く列車
春は一步その後どつと走り去り
春泥や一步踏み出すニューシユーズ
茎立や市場の乱れ温暖化
四月馬鹿なめらかに躁状態
次の間にまだ春炬燵置いてある
落ちてなのお気品留める椿かな
桜咲く葉も青々と開きけり
控へ目に生きてきたはず花疲れ
顔上げるきっかけになる花こぼし
低い声でアリア身内にある晩霜
恋猫や吾がもの顔となる路地よ
花の雨ほろ酔ひ夫のずぶ濡れて
花は葉にくるくる変わる関税率
孕業写真不思議と吾は生きている
目覚むれば何故かホツとす朝寝かな
地に落ちて爆発するか夏蜜柑
楠若葉つかむもの皆みなぎりに
ひそやかに過ごす日々あり春落葉
ネモフィラに抱かれて宇宙回る周る
カタカナの言葉ぞろぞろソーダ水
藤ゆるき重力線に静寂美
口中の切手ほろにが月朧
あるがまま描き写したき芍薬よ
心眼に点眼のごと緑雨かな
十葉の花の白さよ罪深く
ビルの風白く光りて花水木

見つめていつか無心に八重桜
バラ赤シ 男ノ胸肉 一ポンド 星 由江
楠若葉寝食足りて居て不測 若林つる子 りよう
春風や帽子抑えて子ら散歩 奥村 純子
◎連絡先：事務局佐藤久まで

みなとみらい句会

菅原 若水 報

第四二一回 於 横浜市社会福祉センター
令和7年3月13日

名利に眠る文人梅真白 小林 基子
育ててはならぬ嘘なり白椿 里見 美季
ちゆうりつぶサイタサイタと愛でられて 菅原 若水
匿名の足長おじさん春來たる 芳賀 陽子
落椿無縁仏の辺り染めて 藤方さくら
セルフレジ馴らされてゆく二月尽 三沢 容一
只ならぬ世情ひそひそ春マスク 吉村 元明
投げ出せぬ再災の地の芽風かな 若林つる子

第四二二回 令和7年4月13日

みどりの日地球の寿命考証中 金栗トモ子
二分咲きの憂いを知らぬ桜かな 小林 基子
著我咲いて瀬音ほんものらしくなり 里見 美季
初恋は結ばれぬもの桜草 菅原 若水
着流しの結城紬や夕桜 関根 洋子
飛花落花ゆつくり走る霊柩車 長島喜代子
むつごろう今日は参考人として 芳賀 陽子
銭湯に富士山無くす昭和の日 藤方さくら
二丁目のジェンダーフリー春日傘 町野 敦子
散るさくら大気汚染を考査中 若林つる子

第四二三回 令和7年5月11日

目・耳・口揃えて憲法記念日 金栗トモ子
耳たぶも産毛も風の青葉潮 小林 基子
現よりすこし高きに桐の花 里見 美季
復活といふ神の業あり水中花 菅原 若水
憲法記念日パンの耳切り落す 関根 洋子

笛をかかえ地下鉄東口 長島喜代子
反転の飛燕は眠狂四郎 芳賀 陽子
花は葉に老いゆく日々の早きこと 藤方さくら
古文書の紙魚の旅する北領土 町野 敦子
歯医者出て街美しき花水木 三沢 容一
木耳の大耳小耳木須肉 吉村 元明
◎連絡先 菅原若水 s-shinyas6.dion.ne.jp
までご一報ください。折り返し「句会へのお誘い」
をお送りいたします。

星川句会

三月 金栗トモ子 報
令和7年3月3日

春日中逃げない鳩ともう少し 麻生 明
青空から母の声降る木の芽かな 石鎚 優
父さんの誕生日です雛祭り 大塚 真紀
日向ぼこしているハチ公と握手 桐山 芽ぐ
老梅の幹の気迫や空へ伸ぶ 里見 美季
野焼跡黒々と土豊かなり 菅原 若水
さかあがり練習してる春休み 藤原真理子
明日のため沈む夕日よ春渚 長島喜代子
息荒きばん馬の散らす春の泥 原田由紀子
でこぼこの先に三叉路卒業す 町野 敦子
雪柳赤子泣き止み雨上がる 横山 幸子
三国志四文字熟語臚影 金栗トモ子
四月 令和7年4月7日

開花日を逆算している仕付け糸 町野 敦子
朽ちかけた茅葺き屋根に桜舞う 横山 幸子
人類の進歩の歴史針供養 金栗トモ子
五月 令和7年5月5日

十字路の小さき墓標や花林檎 大塚 真紀
ちゃんばらごっこしている老人柏餅 桐山 芽ぐ
菜の花や元気に老いて一万歩 栗原嘉一郎
退き際を決めかねている牡丹かな 里見 美季
次々と子等は巣立ちて若葉風 菅原 若水
母の日や延命希望せずと告ぐ 藤原真理子
しゃぼん玉の飛ぶ方向に夢がある 長島喜代子

たんぽぽの綿毛あなたの胸に飛べ 原田由紀子
驚草の好みの風を待っている 町野 敦子
トランプの大口目がけ草矢射る 金栗トモ子
◎毎月第一月曜日 星川駅下車「かるがも」また
は「アワーズ」で開催。

◎連絡先：事務局佐藤久まで

丹沢句会

竹村 半掃 報
令和7年4月7日

薄氷や埋蔵管がいろいろと 加藤 三眠
如月の富士へ一気にズームイン 尾崎 竹詩
球体のどこも天辺青き踏む 岡本 保
木瓜の花まだ生きる気の靴磨く 酒井 天敏
トンネルを抜け回り道にも雪解富士 北村 文江
如月の光動かす手話の指 菅沼とき子
つくしん坊最上階はシェアルーム 加藤かほる
窓ドレモ 忌忌忌忌忌忌ト 軋ム春 與起
ひとつ灯にふたつの背中雪しんしん 篠崎 妙子
原始より続く火の色野焼きかな 田畑ヒロ子
欠伸して油断した日に春の風邪 三橋 伸子
寒いねのあいさつばかり空き家前 飯田美枝子
きをつけるきちよう^貴とびきてききと^貴まい 羽田 勝二

申告書に春の欠片の還付金

春一番旅の広告さくら色

里の昔語るや柚のちゃんちゃんこ

進化論異論ありとや梅開花

富士山にサンドペーパーかけて春

春愁や紙ひこうきの曲り癖

天窓に春雲飼うている時間

三月

つちふるやつばさつくろふつば九郎

蝶々のときに死者とも生者とも

髪切つて齢を捨てる花菜風

土筆摘むこの岡までの大津波

三月の天気はジェットコースター

どこからかうめのかのせてかをるかせ

春分の足湯に浸かる手術痕

ムスカリや鄙には稀な見目形

遠来の句友芳らい桜咲く

悲曲ノヨウニ／君ヲ群レルナ／華ト散レ

一斉に走り出したる里の春

闇といふ闇を引きずる桜闇

師の家の電話の古し燕来る

それぞれに生物時計桜咲く

昭和平成令和と生きて花の下

萩焼の酒杯のほてり花笑ふ

褪めた被写体初花の下

勝組の列に加わる黄水仙

笑声も変声期なり卒業す

レコーダー壊れしフェアイル春の泥

ポップ屋の虚構の町や花堤

退き際や飛花のひとひら音もなく

物種にあんぱんの臍ありにけり

四月

好きなもの、もしもし・・・みやこわすれどすか

三・一 一あれから星の増えており

佐々木重満

長谷川昭放

杉本 奏空

澁谷 徹

須田 聡子

星 一義

竹村 半掃

加藤 三眠

岡本 保

加藤かほる

渡辺 正剛

田畑ヒロ子

羽田 勝二

三橋 伸子

酒井 天敏

長谷川昭放

與起

尾崎 竹詩

菅沼とき子

飯田美枝子

澁谷 徹

篠崎 妙子

星 一義

三上 泉

芳賀 陽子

須田 聡子

立石 采佳

北村 文江

佐々木重満

竹村 半掃

與起

田畑ヒロ子

歲月はめぐるめぐるや若楓

今更の相性などと蝶二頭

桜闇ダークマターの潜みしか

しやぼん玉悲母観音に逢ひに行く

すいへいせんふねがさかながはるのうみ

春眠や何をするにもなまけ癖

一夜にて現は動き花は葉に

いつものコース獣医と馬に桜吹雪

山姥も鬼女も紅さす夕桜

地球儀を西にたどりて春愁い

些事多忙もう行く春に追い越さる

モナリザがまだ戻らない夜の朧

新緑なる点滴おとす神経科

抗えば返り血覚悟花蘇芳

花菜風散歩の犬に振り向かれ

春昼や自動ピアノに椅子ひとつ

黄砂降る太平洋を航く船に

ひこばえや物言う人に囲まれる

花の下 兵は虚像の石となり

◎連絡先：長谷川昭放

080・5013・6618

Kunnonome100k@nkc.scn-net.ne.jp

川崎句会

於・川崎市総合自治会館

三月

目刺焼く昼餉に妻の置手紙

こつこつと叩いて栄螺焼き上がる

おぼろ月右に左に鍵の穴

少女等の内緒話や桃の花

物置にしまったままの種袋

花便りはなれて遠きはらからに

あちこちを迂回して来る春の風

朧夜や生命線を比べ合ひ

須田 聡子

加藤かほる

澁谷 徹

星 一義

羽田 勝二

北村 文江

菅沼とき子

立石 采佳

長谷川昭放

杉本 奏空

尾崎 竹詩

篠崎 妙子

芳賀 陽子

佐々木重満

飯田美枝子

岡本 保

酒井 天敏

三橋 伸子

竹村 半掃

山田ひかる 報

3月15日(土)

青島 哲夫

麻生 明

安藤 均

植田いく子

加賀田せん翠

川島由美子

斎藤佳代子

佐藤 鈴代

新入社員へたての鍵よこの鍵

春を呼ぶ父の形見の置き時計

シャベル置き春の寄せ植黄色系

初恋は稔らぬものよチュウリップ

オムレツのとろり菜の花明かりかな

鍵のなき秘密の小箱冴返る

啓蟄や獣医出て来て体操す

どこまでも見透かしている享保雛

四月

江戸城の大奥の跡春惜しむ

雲の奥けんかしたのか春の雷

街道は菜の花明り奥武蔵

朧の夜何度も同じこと聞かれ

難問に奥歯がうづく夕桜

月朧どこにでもある闇の奥

ここで咲きここで散りゆく桜かな

花筵語尾に宿りぬ国訛

花祭り集いなごやか檀家衆

深刺と古布で描いためざしたち

石鹸玉君の涙はつくりもの

風光る金管楽器の中に吾子

春深し旅心地なる中央線

桜葉降る襟足がこそばゆい

晩年の花かと思ふ紫木蓮

紙風船正しくたたむネイルの指

五月

病歴を自慢してをり時計草

人影の千差万別夕薄暑

千枚田ひとみ輝く田植かな

独り居の転居の知らせ著莪の花

ときめきは少し小さいさくらんぼ

弱点のない人という薄暑かな

サンガラスはずすか迷う立ち話

若葉雨弱酸性の化粧水

佐藤 廣枝

佐伯 悦子

白井千代子

菅原 若水

関戸 信治

花澤ちいこ

三沢 容一

4月19日(土)

山田ひかる

青島 哲夫

安藤 均

植田いく子

加賀田せん翠

川島由美子

斎藤佳代子

佐藤 鈴代

佐藤 廣枝

佐伯 悦子

白井千代子

菅原 若水

関戸 信治

花澤ちいこ

三沢 容一

吉居 瑠子

5月17日(土)

山田ひかる

青島 哲夫

麻生 明

安藤 均

植田いく子

加賀田せん翠

川島由美子

斎藤佳代子

佐藤 廣枝

鈴なりに窓の園児や春の雪

流木のある焼肉屋風光る

消息のそのさき知れず朧月

如月や着ぐるみの鬼逃げ回り

留守番の居ぬ古本屋鳥雲に

リップステイック少し薄めに春隣

料峭やどつちつかずが心地良い

野火奔る空に鴛や地に窮鼠

四月

はなならてふ大合唱団清楚

鳥帰る鳥に結界無きごとく

お役目は年に一度の甘茶仏

風車ふと母のいる白昼夢

薫風や花農園につづく道

紙風船どんな息にも膨らみぬ

ぎしぎしや深呼吸する肺ふたつ

目玉焼きのふちのカリカリうらけし

永き日の石段上る猫の影

浜っ子の市歌朗々と一年生

五月

朝風呂の父の禪や青葉騒

葉桜の雨や北斎美術館

豹柄の浪花の媼春闌くる

花蜜柑やさしくされて無愛想

牧水の旅路の果ての松の芯

青葉木菟開いて重くなる手紙

木下闇洞窟黒々と口を開け

北風の熱い国なり青桜

葉桜や象の不在の象の檻

ブルマンの香り五月の風にのり

ひさびさの街に迷ひぬ春時雨

◎毎月第二金曜日 夜8時より。ZOOM使用。

第二水曜日

出句締切、事前投句

◎連絡先 杉美春 miharusugi@jcom.home.ne.jp

湘南サンシャイン句会

三月

於・藤沢市役所本庁舎5階会議室

がうがうと堰の春呼ぶ水の綺羅

進歩せし科学も火災消せぬ野馬

子の声と春の公園手を繋ごう

進展のなき交渉や春の雪

進入路どこで違えし菜種梅雨

春疾風 黒イ頬紅ナラ ドウダツ

白魚の白ゆえ進退決めかねる

長生きの是非に及べり畑を打つ

春キャベツ産着に息のやわらかく

山笑ふ進路決まりて旅立つ子

仏壇にも姑のレシビの雛チラシ

三つ編の子がぞろぞろと地虫出づ

豆の花見上ぐる空へ飛ぶ準備

春禽のこゑダーウインの進化論

四月

於・藤沢市民活動推進センター

退廃は進歩の一步チューリップ

スマホ持ち勘の鈍りし紫木蓮

ハイヌーンという黄の牡丹飛びつきり

初生りのアスパラガスの柔らかし

韃靼を渡りしてふの高さかな

山火事の山は笑えず咆哮す

恐竜ト万ノ ドット ノ 春の雨

雪吊りが退く前の兼六園

清明の磨ききれない空の青

骨董市終りし境内夕桜

ヒトやがてヒトを滅ぼす花盛り

退院の眼に連翹は眩し過ぎ

たんぼぼの絮に託せし門出かな

樹々芽吹く齡忘れて恋をする

地を擦りし盲目犬の尾に春日

堀口みゆき 報

令和7年3月7日(金)

青木 敏行

青柳 白芳

安藤久美子

荻野 樹美

金栗トモ子

芳賀 陽子

日置 正次

保里よし枝

馬来まち子

山口 愛子

山下 遊児

吉田半夏生

堀口みゆき

五月

令和7年5月2日(金)

於・藤沢市民活動推進センター

レジを出てふと口ずさむ労働歌

野に置かれ誰と遊ぶや風車

残念な謝り方です熊ん蜂

サクスの「星に願いを」春の昏

恋猫の傷をいやさむ雨しとど

揚雲雀居心地のよき気流あり

フオーク・ダンス 白詰草ノ先ハ パリー

雨蛙枝に移れば枝になり

兄妹が一緒の忌日沙羅の花

若葉雨遊び疲れた三輪車

猫眠る無人の駅や麦の秋

行く春やゆつくり止まるオルゴール

朝掘りの筈にある微熱かな

ジャスマミンの重なり合ふて匂ひけり

逃水を追ひかけ続け黄泉の縁

たぶのきの瘤の増えたり子供の日

◎「俳句四季」六月号(5/20発売)「句会拝見」

に湘南サンシャイン句会の紹介&集合写真とメン

バーの句が二句づつ掲載されます。

◎毎月第一金曜日、通常の句会場は藤沢市民活動

推進センター。

◎連絡先 堀口みゆき

090・3914・0568

email mihuhori.guchi@yahoo.co.jp

吟行しようよ! (第二回)

「根岸森林公園からドルフィン」

佐藤 久

私の住む横浜市中区には定番の観光地がいくつもありますが、観光地ではないけれど吟行に良さ

そうなどころもたくさんあります。今回は私が犬の散歩でよく行く「根岸森林公園」をご紹介します。と思います。中区の高台にあり、交通の便はあまりよくありませんが、根岸駅、桜木町駅などからバスが出ています。最寄りのバス停は「旭台」か「滝の上」。徒歩でしたら、山手駅から15分くらいです。



ここは慶応三年（1867）に日本ではじめて洋式競馬場が作られた場所で、自然の丘陵を活かした18ヘクタールもの広大な公園になっています。四季折々に様々な顔を見せてお勧めの公園です。園内には芝生広場が広がるエリアと、旧根岸競馬場の一等馬見所を背景に見晴らし台などがある高台のエリアがあります。芝生広場エリアには梅林や桜山、鴨の来る池などがあります。特に桜は横浜で有数の名所と言えるでしょう。高台にある旧一等馬見所は三つの塔を並べた印象的な建物で、一見の価値があります。天気の良い日には見晴らし台から富士山もよく見えます。また、公園に隣接して「馬の博物館」があり、こちらも楽しめます。（但し、資料修復等のため現在は休館中）。

さて、森林公園を散策した後、公園から右手に数分歩くと、ユーミンの曲で有名になったレストラン「ドルフィン」があります。荒井由実の世代は一度行ってみても良いでしょう。遠く三浦岬も見えるし、ソーダ水の中に貨物船も見えますよ。なお、歌詞では山手のドルフィンとなっていますが、西洋館のある「山手」はだいぶ遠く、徒歩で30分以上かかりますので、お間違えのないように。歌詞にある坂は不動坂。結構な坂なので上るのはたいへんですが、帰りはこのルートで帰っても良いかも知れません。坂を下りると根岸駅方面に行きます。お疲れ様でした！

夏の一句



(写真：里見美季)

斑猫もわれも一匹谷戸の闇	猪狩	鳳保
トマト出来ことしの菜園収穫期	日置	正次
海見つつ我も白帆となり涼し	安藤	靖
連休の紙魚は車輪の下が好き	町野	敦子
初夏の守宮にかへす会釈かな	石鎚	優
雲の峰ひとつの町を覆いたり	日置	正次
正面に丹沢座る晩夏かな	細貝	昭吾
新緑や山家育ちの鎌を研ぐ	横川はつこう	
星涼し母を乗せたき駱駝の背	内田ゆり子	
草除く指にすつくと子蟻螂	永井	朝子

II 地区動向・消息 II

- 3月2日（日）定時総会開催 54名出席
- 5月8日（木）拡大幹事会開催 30名出席

総会の反省点、今期活動計画、俳句大会準備の流れ・役割分担案、他

3. 新会員紹介

《正会員》

小林詩苑（川崎市） 山口愛子（藤沢市）

《会友》

須田聡子（小田原市）

4. 会員動静

風野でら（俳名変更） 旧名・山澤和子

日置正次（川崎市） 住所変更

岩田六川（俳名変更） 旧名・六川

小林 梢（川崎市） 住所変更

5. 逝去謹悼

加藤よい子（鎌倉市） 令和六年十二月

中澤柚果（秦野市） 令和七年三月

《編集後記》

◎神奈川県内のお勧め吟行地を紹介する「吟行しようよ」の原稿を募集しています。当着順に掲載します。

◎会報169号では**秋の一句**を募集します。

◎投句・投稿は編集人まで。8月20日締切りです。

発行所 神奈川県現代俳句協会

発行人 芳賀 陽子

編集人 杉 美春

T252・0325

相模原市南区新磯野4-4-1-506

電話 090・6534・1452

Eメール miharusugi@jcom.home.ne.jp

事務局 佐藤 久

電話 090・6587・0113

Eメール hisashi36@fj9.so-net.ne.jp

印刷所 (有)湘南グッド

